

より創造的な読みを目指して

— 館岡洋子著 —

『ひとりで読むことからピア・リーディングへ — 日本語学習者の読解過程と対話的協働学習 —』

小笠 恵美子

要 旨

館岡洋子著『ひとりで読むことからピア・リーディングへ—日本語学習者の読解過程と対話的協働学習—』を紹介する。本書では第二言語の読解教育についてピア・リーディングという新しい指導法が提案されている。前半は読解とは何かという認知的な研究の歴史から、現在読解教育で実際に行われていることまでを取り上げ、筆者自身による第二言語の読解過程の調査について述べられている。この個人の読解過程の観察の中から、ピア・リーディングという学習方法が考え出された。後半は複数の学習者がいる「授業」ですることとして、ピア・リーディング（協働的な読解）が提案されている。読解はひとりでもできる認知活動であるが、それを複数の人が参加する授業で取り扱う意味は何か、その場合授業をどうコーディネートするかを考えさせてくれる。これまでの読解研究から、今後の動きまでを網羅して説明していることから読解教育とは何かといった興味を持つ言語学研究者にもお薦めであるし、同時に具体的な授業例を示していることから、読解の授業でどのようなことをすればいいのかに悩む日本語教師にも一読を薦めたい一冊である。

【キーワード】 読解過程、ピア・リーディング、協働的な学習、 相互的関係

1. 本書を薦める理由

本書は、読解という認知活動がどのようなものであるかを紐解き、学びの共同体であるクラスでどのような読解の学習活動ができるかが具体的に紹介されたものである。これまでの読解研究から今後の展望までを網羅した概説があり、つづいて第二言語の読解教育のあり方とその方法について書かれている。読解研究、読解教育に興味を持つ研究者や実践者に一読を薦めたい。とくに日ごろの実践の中で、読解の授業ではどのようなことをすればいいのかに悩む日本語教師にはぜひ読んでもらいたい。

本書で読解授業の方法として提案されている「ピア・リーディング」はテキストの理解を他の学習者（ピア）と共有する活動である。読み手は自身の読みの理解を仲間の学習者に語り、仲間もまた読み手として理解したことを提示する。こうした読み合いによって互いに自分の理解を再認識することができる。読み手は仲間によって、自分とは異なるテキスト理解の視点に気づかされる。その結果、読み手は前の理解よりも、さらに深く広い視野をもって創造的な読解ができると考えられている。また、この活動に

よって、学習者は複数の学習者が集うクラスに参加する意義を感じることができるだろう。

本稿では特に、ピア・リーディングを支える協働的学習の考えと、ピア・リーディングを授業で実践する際に重要な、学習者による協働的活動の意義の理解について述べる。

2. 問題提起

日本語教師は、読解の授業をしていて「学習者は本当に理解しているのだろうか」「これで読解ができたと言えるのだろうか」と不安を覚えたことはないだろうか。本書の著者は授業の中で、学習者が文章を理解しているか否かに疑問を持ち、「どのようにしたら楽しく活気ある読解の授業ができるのか」「理解深化のためには何をしたらよいのか」という問題意識のもとに研究を行ってきた。

本書の冒頭では3つの問題が提起されている。①読むことが難しい、理解できないとはどういうことか②読み手は読みの過程で何をしているのか③読解の授業とは何をするものなのかである。これらの問題は章を追ってそれぞれ解決されていく。

3. 本書の構成

本書の章立ては次のとおりである。

序章 問題提起

第1章 読むこととは

第2章 日本語学習者はどのように読んでいるか
—日本語学習者の読解過程—

第3章 ピア・リーディング—協働的活動と提案の
試み

終章 読解授業におけるピア・リーディングの意
義と可能性

タイトルの『ひとりで読むことからピア・リーディングへ』は本書の全体の流れをよく表している。本書は前半部分(第1章、第2章)と後半部分(第3章、終章)に大きく分けることができる。第1章、第2章では主に「ひとりで読むこと」に関する研究がなされている。後半の第3章、終章は「授業でできること」としてピア・リーディングが紹介されている。

4. 「ひとりで読むこと」に関する研究

第1章は主に認知心理学における「読み」のとりえ方について述べている。読みとはどのような過程を経ているのか、「理解」のために頭の中でどのような活動(情報処理や「読み」のメタ認知)が行われているのかを解明する認知心理学の研究を示し、それらを踏まえて第二言語教育、日本語教育の分野でどのような研究が行われてきたかを紹介している。そして、冒頭で提起された問題①「読むことが難しい、理解できないとはどういうことか」の答えとして、既有知識とテキスト情報とのズレに気づき、自身の既有知識を変革していくことができるかどうか重要な点であると述べている。つまり読むことが難しい、理解ができないということは、自己の読みの状態をモニターすることができず、テキストの情報を自己の知識に位置づけたり統合したりすることができないということである。

第2章は日本語学習者の読解過程に関する筆者自身による実証研究が紹介されている。筆者はプロトコル分析を用いて、読解能力の高い日本語学習者と読解能力の低い日本語学習者が読解中の問題をどのように解決していくのかを比較観察し、問題解決の方法と読解力との関係を示している。その結果、優れた読み手はテキストの内容と自分の既有知識を照らし合わせるような自問自答を数多く行い、自己の

認知状態をモニターし、コントロールしていることが明らかになった。問題提起②「読み手は読みの過程で何をしているのか」の答えとしては、仮説の設定、検証を行っていること、既有知識と新知識の交流を行っていること、テキスト全体で何が述べられているかを、読み手は自問自答しながら読んでいることが明らかにされた。

5. 「ピア・リーディング」に関する研究

第3章は2章までで明らかにされた個人の読みを、複数の学習者がいる教室で扱う方法として、ピア・リーディングを紹介している。

「ピア・リーディング」という言葉は著者が初めて使った言葉である。「ピア」とは「仲間」という意味で、仲間(学生同士)との相互行為による学習の文脈で使われる言葉である。日本語教育では作文教育で池田(1999)が「ピア・レスポンス」という言葉で使って以来、よく知られるようになった。この、学習者の相互行為による学習は、「協働的学習」という言葉で教育学の分野でも注目を集めている。その背景には、権威を持った教師から一方的に知識が伝達され、学習者はただ受身的に教えられるというよりも、水平的な関係の仲間との教えあいのほうが、学習者が主体的に学ぶことができると考えられるようになったという「学び」に対する考え方の変化がある。

ピア・リーディングは、授業は複数の人間が場所と時間を共有し、相互に影響を与え合う、学びの共同体における実践であるという、著者の哲学に基づいている。その哲学を支える理論としては、パリンサーらの「相互教授」、ヴィゴツキーの「最近接発達領域仮説」、レイヴ&ウエンガーの「正統的周辺参加論」などがある。これらは「学び」は教師や親といったより知識をもっている者から一方的に与えられるものではなく、その場にいる仲間、自分のおかれた環境との相互作用で生じるとする点が共通している。

第3章ではピア・リーディングの実験でその効果を検証した上で、授業中の実践例を示している。第3章第3節では具体的にピア・リーディングの授業例が紹介されており、それが実際に実現可能なことであり、効果を持ちうることが示されている。ここでは、学習者の一人が新たな自身の理解を発表すると、それを支持する意見、さらに疑問意見が生じ、その疑問に答える形で最初の意見が補強され理解が深化していくさまが描かれている。そこからは活気のある

教室の様子が想像される。このような反応は教師にとっても学習者の理解やテキストへの興味が実感される。

第4章はピア・リーディングを踏まえて、授業中の仲間の役割、対話による協働的学習の意義を検討している。

問題提起③の「読解の授業とは何をやるものなのか」の答えの一つとしてピア・リーディングなどの協働的な読解作業をあげることができる。協働的活動が勧められる理由として、協働的な読解作業について次のような利点が挙げられている。a.「仲間とともに問題を解決することによって読解という頭の中の見えない過程を相手に見える(聞こえる)ようにすることができる(外化の必然性が生まれる)」 b.協働の相手との読みの違い(テキストに対する理解、視点のズレ、ストラテジーの違いなど)に気がつき、自己の読みを見直す機会になりうる。つまり、「テキストの理解」は個人でできる行為だが、それを複数の学習者がいる授業で扱う意義は、自分の理解を外化し、他者との比較によって自己の読みの変革が実現されることである。外化の過程で、学習者は読解上の問題点を明らかにし、相手と話し合う機会を持つことができるという点からも、協働的な読解活動が評価されている。

6. 学びの共同体の形成

最後に本書で提案された「ピア・リーディング」の意義をもう一度考えてみたい。まず、創造的な読みができる、次に仲間に対する責任感やクラスへの帰属意識が学習継続の動機となりうるという意義が挙

げられる。

これらの意義は外国語学習にとどまらない。例えば母語でも輪読会を行う意義は、複数名が読んだ内容を共有し、理解、感想を述べ合う場を持つということにあるのではないだろうか。輪読は担当者が読んだ内容に関するレジュメを作り、説明するといった形式がとられることが多いが、参加者はレジュメ作成や感想を述べ合うことで自身のテキストへの理解を外化し、互いの感想を聞くことで新たな理解を創造していく。また、一人で読むには難解な書も、仲間と共に読むと、その場に参加する責任を果たすために読まざるを得なくなる。つまり協働的な活動が読み続ける動機となっているのである。

ピア・リーディングは共に学ぶ仲間の存在なしには成り立たない学習方法であり、学習と共に人間関係を形成していく可能性を持っている。館岡はピア・リーディングの相手とは互恵的な関係であり、協働的な活動が行われるクラスでは学びの共同体が形成されるとしている。

言語学習を、複数の学習者がいるクラスを通して行う意味は、この「学びの共同体」に所属することにあるのではないだろうか。言語学習では語彙の記憶など個人の努力に負うものが多く、独学で外国語を身につけられる者がいる一方で、クラスを通して学習することを必要とする者も多い。それは、クラスの仲間とのコミュニケーションによって理解が深まる、動機が維持でき学習が続けられるという効果があるからであろう。ピア・リーディングはこれらの効果を高める学習活動として期待できる方法だと思われる。

おがさ えみこ／東海大学留学生教育センター

emi-oga@cronos.ocn.ne.jp